

# 私の出会った

## 春日井建

# 歌人



春日井建

## 水原紫苑

ホテルのレストランだったのだが、お魚を召し上がる先生のきれいなナイフとフォークの使い方が今も映像として胸にある。別に気取っているわけではなくて、自然できれいなのである。

先生の美少年伝説はあまりにも名高いが、その頃を知る人に尋ねると、東京風のきついドライな美しさではなく、むしろ上方風のはんなりとした流麗な線の美少年だったと教えてくれた。それでいて時折り人をどきりとさせる言葉の口にするのが魅力だったとも。

同時代に生まれ合わせなかったのが残念と言えば残念だが、そうしたら私は現在の最良の師を持っていないことになるので、仕方がないと諦めるべきだろう。第一、そんな美少年に出会ったら、私の性格からして、大好きか大嫌いか、あるいはその二つの混じり合ったわけのわからない心になってしまいそうで、いずれにしても大変である。遅れて生まれてよかったのだ。

さて、春日井先生の最新歌集が近々刊行される。まさに久しい待望の一冊である。世紀末の素敵なプレゼンになるだろう。

(みずはら・しおん「中部短歌」所属・

「NHK歌壇」番組進行役)

春日井建。実に美しい名前である。これは本名だからなおさら羨ましい。そして、この名ほど先生その人の雰囲気をよく表すものもないだろう。春の若さ、日の明るさ、井戸の深さ、神話の英雄俊建の劇的な鋭さ。今年(一九九八年)、先生は還暦を迎える。とは言ってもお誕生日が十二月なので、まだまだ先の話だが。現代人の年のとり方は昔とは全く速度が異なり、七十、八十でも壮年を思わせる人が少なくなけれど、中でも先生の若さは、やはり際立っている。姿かたちや身のこなしもあるだろうが、何か時間の流れをさえぎる光線がまわりを包んでいる感じなのだ。先生は名古屋、私は横浜に住んでいるので、相談したいことがあるとご自宅にお電話する。その都度の「春日井です」という第一声が、低音ながらまことに輝かしく、ああ先生だな、

と思うのである。ラジオのディスクジョッキーをなさっていたというのもよくわかる。相談そのものにも必ず先生らしい明快な論理で答えを出して下さい。いつも突然の問いかけなのに、迷いや言い淀みはほとんどないのだ。大塚寅彦さんたちと一緒に、先生に不思議なレストランに連れて行って頂いたことがある。個人の邸宅を改造したというそのレストランは、ほの暗く、現代の日本の都市にあるとは思えない、一種の非常体制の匂いがあった。もう十年近く前になるかも知れない。そこで三島由紀夫の思い出などを聞かせて頂いた。料理は何が出たかよく覚えていないのだが、たしかタルタルステーキがあったような印象が残っている。

またほかの時に、やはりみんなで先生を囲んで食事をしたことがあって、それは普通の